

報 告

第 4 回世界創傷治癒学会連合会議 WUWHS 2012

国際医療福祉大学 福岡リハビリテーション学部 理学療法学科 川崎 東太

1. はじめに

4th Congress of the World Union of Wound Healing Societies (WUWHS2012; 第4回世界創傷治癒学会連合会議) は、2012年9月2日(日)～6日(木)、パシフィコ横浜(横浜市西区)を会場に、北海道大学名誉教授の大浦武彦先生を名誉会長として開催された。この国際学会に参加および発表させて頂く機会を得たので報告させて頂く。

2. WUWHS2012 について

WUWHS は4年おきに行われている創傷治癒に関する国際学会であり、オーストラリア、フランス、カナダに続いて、今回はアジアで初めての開催となった。主催団体は日本褥瘡学会、日本創傷外科学会、日本下肢救済・足病学会、日本創傷・オストミー・失禁管理学会の4団体の主催により開催され、医師はもとより多くの医療関係者や研究者が参加し、盛大に行われた。参加者は3000名を超え、演題数は、口述が325演題、ポスターが526演題と海外からも多くの演題発表が行われた。その他にも三笠宮彬子女王による特別講演や基調講演、招待講演等、多数の講演やシンポジウム、セミナー等が催された。

3. 「Better Care, Better Life」

本大会のスローガンはBetter Care, Better Lifeであり、医学的な治療が必要になった患者さんがより良い生活を送っていくためには、より良いケアが必要になる。これは創傷治癒にもあてはまることであ

り、高齢化率の高い日本では、寝たきり高齢者に不可避の褥瘡や、近年増加している糖尿病や末梢動脈疾患による下肢の潰瘍・壊死など、重要な問題も多い。そのような患者さんに対して、日々の関わりの中で、現状より少しずつでも向上・追求していき、それを積み重ねていくことが、患者さんの生活の質の向上につながっていくと期待されている。

筆者は理学療法士として褥瘡や下肢潰瘍などの創傷ケアに関わっているが、創傷ケアも他の医療と同じく、多職種間の連携によるチーム医療が重要である。創傷の治療に関しては医師により行われるが、創傷発症のハイリスク群に対する予防的ケアや、治癒後の再発予防に関しては、看護師や義肢装具士、理学療法士などのコメディカルが中心になってケアにあたっていく必要がある。また、褥瘡であればシーティングやポジショニング、下肢の潰瘍であれば、靴などのフットウェアや歩行指導なども重要になってくる。

4. 学会に参加して

国際学会への参加や発表は今回が初めての経験であったが、この機会を与えて頂いたのは、佐賀大学医学部附属病院形成外科の上村哲司診療教授である。私が臨床で働いていた頃、褥瘡に興味を持ち、理学療法士として創傷ケアに関わっていきたいという思いが強くなり、形成外科の門を叩き、今も大学院生として形成外科に所属している。創傷ケアに関わる医療者として WUWHS はぜひとも参加したい学会であり、私も参加したいと思っていたのだが、上村先生から、この学会に演題を出してみないかとさせて頂き、参加だけでなく発表するチャンスも得られた。

当初はポスター発表だと思っていたのであるが、「口述で発表しよう」と上村先生に言われ、英語が

国際医療福祉大学

福岡リハビリテーション学部 理学療法学科

〒831-8501 福岡県大川市榎津 137-1

得意でない私は非常に不安だった。しかし、これも自分が成長するチャンスだと思い、腹をくくった。2011年12月に演題登録を行い、翌年3月に演題採択の通知が届いた。その頃は他の学会等もあったため、WUWHS2012のことはまだそれほど頭の中にはなかったのであるが、学会が近づいてくるにつれ、日に日に不安が増してきていた。不安のピークは発表の2～3日前で、何となく胃も重くなっているような感じもした。しかし、この不安を少しでも解消できるように発表の準備は入念にしていた。発表原稿は知り合いのオーストラリア人にチェックしてもらい、ICレコーダーへの吹き込みも行ってもらった。発表原稿を録音してもらったICレコーダーで発表原稿を何度も聞き、とにかく練習した。私の妻も国際学会で何度か発表を経験していたので、妻のアドバイスももらいながら、できるだけ不安を少なくするように努めた。そんなこんなで学会の日を迎え、会場であるパシフィコ横浜へ向かった。

会場はこれまでも他の学会で何度か来ていたのであるが、今回は国際学会ということで、当たり前ながら外国人の多さに驚いた。受付でネームプレートやコングレスバッグ等を受け取った後、早速、自分が発表する会場の下見に向かった。発表会場は70～80人程度が入れる広さの部屋で、発表も和やかな中に活発な意見も飛び交っていた。私の発表は5日の午前9時からだったのだが、当日は5時に起きて、最後の発表練習を宿泊していたホテルの部屋の中で何度も行った。会場へは1時間前に着いたが、ここまで来たらジタバタしてしまうのではないと思い、自分の発表の順番がくるまで静かに待った。

発表が終わった後は肩の荷が下り、ゆっくりと学会に参加できた。また、その後は他施設の先生方と横浜中華街へ繰り出した。そこでは海外のフットケア

の現状や文化の違いなど、学会では聞けないような面白い話も聞くことができた。こういった夜の懇親会も、学会参加の楽しみの一つである。学会の最終日は自分の発表も終わっていたため、ゆっくりと参加することができた。

この学会に参加して驚いたのは、演題発表が終わると、質問者がマイクの前に列を成して待機していたのである。日本の学会では質問がなく、座長からのみの質問で終わる場面もあったりするが、外国の方のアグレッシブさには驚いた。また、もう一つ感じたのは、外国の先生方の座長の上手さである。内容は英語のためよく理解できなかったが、常に自分が話題を提供して意見を出してもらい、最後にしっかりとまとめるというテクニックは、感銘を受けた。座長の先生方の進行の上手さに、学会も非常に盛り上がっているように感じた（実際に盛り上がっていた）。

5. おわりに

今回のWUWHS2012に参加・発表させて頂き、大変ではあったが、非常に自分にとって実りのある学会であったと思う。現在、筆者は理学療法士として創傷ケアに関わっているが、この分野での理学療法士の介入は、まだまだ少ないのが現状である。しかし、褥瘡やフットケアといった分野はシーティングや歩行能力、ADLの向上など、リハビリテーション関連職種の専門性が必要とされることも多い。そのため、できるだけ多くのリハビリテーション専門職の方にも、創傷ケアに興味を持って頂き、慢性創傷で悩む患者さんのQOLの向上につながっていけばと思っている。次回はイタリアでの開催が予定されており、筆者もぜひ演題を出して参加したいと思っている。